

---

# 伝文

日本口承文芸学会 会報  
第56号 2015年2月 発行

日本口承文芸学会

〒 ー 東京都調布市緑ヶ丘 ー

白百合女子大学 間宮史子研究室

ー ー (内線) / ー ー

---

## 日を招くクサカ

三浦 佑之

オホハツセワカタケル (のちの呼称では雄略) という天皇がいる。『古事記』では、即位する前は殺伐とした兄弟殺しの伝承が続き、即位した後は女性をめぐる多彩な伝承が並ぶ。そのなかの一つに、日下(くさか)の地に住むワカクサカに求婚する話がある。

倭から「日下の直越(ただごえ)」と呼ばれる道(生駒山の南を通る)を西に向かった辺り、大阪湾がずっと北に入り込んだ奥のところの日下だが、オホハツセが、その地に住むワカクサカに求婚した時(この求婚にいたる経緯を説明するには五指に余る殺人ゲームを経る必要があるのだが紙幅の都合で省略)、ワカクサカは答える。「日を背きて行幸でましし事、甚恐し。故、己れ直に参上りて仕へ奉らむ」と。

わざわざお越しいただいて恐れ多いというニュアンスで言ったと解釈するだけなら読み過ぎせばいいのだが、その場面で、なぜ、日を背にしておいでくださったことは大層恐れ多いので、私のほうから参上してお詫言いたしますと、ワカクサカは言うのか。もちろん、この言葉の背後に「日の御子」オホハツセが意識されているのは当然だ。しかも、このせりふは、オホハツセの遠い先祖にあたるカムヤマトイハレビコ(同、神武)が、「吾は日の神の御子として、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今者より行き廻りて、背に日を負ひて撃たむ」と言ったのを思い出させる。

では、どちらを向いて進めばいいのかというような揚げ足取りをする暇はないので本題に入るが、じつはイハレビコの発言も、おなじ「日下」の地でなされたものだというのを、ここでは問題にしたいのだ。なぜ、クサカの地と日の神の御子(天皇)とが結びつくと、太陽の方位と日の御子の立ち位置が注目されるのか、伝承の語られ方という点で興味をそそられる。よそではそんなことはないのに。

こういうところに食いつきやすい先学は西郷信綱だが、案の定、『古事記注釈』を確認すると、いろいろと説明した上で、「日を背きて」云々が「ここに出てくるのは、「日下」という文字と関係するに違いない」と述べている。たしかに、わかりやすい繋げ方である。

しかし一方で、ここに<文字>を介在させてしまうと、説明の論理はずいぶん窮屈なものになってしまうのではないかという物足りなさを感じないわけにはいかない。もちろん、日本口承文芸学会が出す「伝文」の原稿だから媚びているわけではない。漢字しかない時代の文学を専攻しながら口承文芸学会に所属するという私の立場からすると、イハレビコが「日に向ひて」戦うのはよくないと発するの、ワカクサカによる「日を背きて」という発言が出てくるのも、そこが「クサカ」と呼ばれる地だからであって、漢字「日下」に引かれてのことではない、そう考えてみたいのである。

クサカという土地(それは名でもあり場所でもある)が舞台になると、おのずと「日に向ひて」とか「日を背きて」とかの伝承が引き出されてしまうのではないのか。語られる伝承というのはそうした連想のなかで語られてゆくのだ、ということを論理化できないものかと考えて口承文芸学会に入会したはずなのに、語りの論理をみいだせないままに間もなく日は暮れようとしている。(東京都)

年 月 日、白百合女子大学にて今年度秋季例会が開催された。現在、昔話をはじめとする説話の記録とその報告、そして海外の説話の翻訳が多くなされ、それに伴って新たな研究成果が生まれつつある。こういった現在の動向をふまえ、今後どのような方向を進んでいけるのかという問題意識のもと、この例会では「口承文芸モチーフの分布と伝播」というテーマで三人のパネリストによる報告がなされ、その後、活発な質疑応答が行われた。

まず斧原孝守氏が「東アジアにおける昔話モチーフの分布」と題し、「稲葉の素兔」、「蛇婿入り 芋環型」、そして「黍団子」のモチーフを持った昔話について、それぞれ東アジアの類話を挙げながら、その分布から伝播経路や文化的層位がうかがえることを述べられた。また、モチーフの分布のみならず、それらがどのように物語の中で機能しているかということに留意することで、より精度の高い比較が可能になるのではないかということ指摘された。

直野洋子氏は、ロシアの研究者であるユーリー・ベリョースキン氏による神話のコンピューター・データベースに実際にアクセスして使い方を述べつつ、神話「人はなぜ死すべきものになったか」を例に挙げながら氏の研究を説明された。ベリョースキン氏にとって、このデータベースは太古の移住や文化間の接触を跡付けるという歴史的課題のために構築したものであるという。こうした考えに対して、口伝えが数万年という時をさかのぼることが可能であるかという疑問も後に出されたが、このデータベースが話型やモチーフなどの比較を行う口承文芸研究にとって、有効性を示唆する報告であった。

山田仁史氏は、幅広い視野で話の類似をどういった方向で研究していくのか、そしてその注意点について「環太平洋の神話 分布・伝播研究のために」と題して、大林太良氏の研究を取り挙げつつ、そこに自身の論や諸外国の研究も視野に入れて、資料自体や伝播に関する諸問題について言及された。その上で、比較研究には、国際的な研究協力・交流が不可欠であるということ報告された。

このパネリストの三方の報告はそれぞれ、比較研究のための新たな資料の収集方法、その際の留意点、そして実践といったものであったと思われる。よって、これらの発表は、これからの口承文芸の国際比較研究の可能性を示すものであったと言えるだろう。

こうした報告を受け、ベリョースキン氏についての質問があがった。例えばデータベースの集積方法や更新、そしてそのデータ化された話についてである。それに対し、ロシアのフォークロア研究ではインターネットが有効活用されており、様々な分野の研究者が協力し合っているという現状を紹介された。そしてデータ化される話はベリョースキン氏が神話的なモチーフを選び、昔話かどうかは重視していないという。こうした話のデータベースを口承文芸研究者が用いるのに際して、どのレベルで比較をすべきなのか、またどのようにして利用していったらよいのかなど、今後のより広い視野に立つての比較研究に活用すべく様々な議論がなされた。

また、こうしたモチーフや話型の比較研究が何を指すべきなのかという大きな問題も議論された。

(東京都)

昨年の11月、ベトナムのハノイに1ヶ月滞在した。表向きはハノイ大学の日本語学部で、日本文学の授業をする目的であったが、ひそかに昔話の研究を旨としていたのである。しかし、授業はともかくとして、昔話の方はほとんど成果がなかった。最大の理由は準備不足だった。ともかく行けば大学や研究機関にいる専門の研究者から情報が得られ、もしかしたら現地にも足を運べるのではと期待していたが大間違いであった。今のベトナムは英語や日本語のブームで、経済発展に忙しく、昔話に関心を寄せる余裕が無いのだろうと思った。

しかし、せっかくベトナムまで来たのだからという悔しさもあって、子ども向けの昔話絵本を買ってきて、ベトナム語の辞書と首っ引きで読むことにした。「桃太郎」が載っていたのでまずそれを読み、続いてグリムの「いばら姫」、そしてベトナムの「蚊の由来」をなんとか和訳したところで、滞在の時間切れとなった。これが昔話研究のすべてであった。こんな内容では報告にもならないので、一つの体験を披露しよう。

ハノイでは歩道で商売する人が多く、道端で食べ物を買ったり、小さな腰掛の青空喫茶店でお茶を飲んだりしている。路上の床屋もあちこちで見かける。ある小さな公園のそばで老人が床屋をしていたので、もの珍しげに見ていたら、客が帰った後、老人は自分の掌にボールペンで日章旗を書いて見せた。若いベトナム人に、コリアと間違えられることがあったので、老人の眼力は鋭いと思った。続いて、1937と書いたので、私も紙切れに1950と書いて、お互い目で笑った。彼は77歳であった。しかし筆談による会話はそれ以上は進まない。コミュニケーションには、**どうしても**声の言葉が必要だ。

それから何日かして、同じ場所で老人は、子どもの頭を電気バリカンで刈っていた。時々痛がる素振りをする子どもを、そばの母親は心配そうに見ていた。刈り終わると、顔は剃らずに終了した。老人がお金は要らないといった態度をとり、母親は恐縮して帰っていった。その日、私はバックに日越辞典を入れていた。取り出して、日本語の「無料」の項目を引き、ベトナム語の説明の部分指さし、老人の反応を待っていたが、その視線は定まらず、やがて紙面から離れていった。私は嫌なものに触れた気分で、あいまいな笑いのまま、その場を立ち去った。老人はベトナム語が読めないのではないか、と気にかかった。

ハノイ大学の授業に行った時、日本語学部のなじみの先生に、思い切ってベトナム人の識字率について聞いてみた。年輩の女の先生は、今の若い人は百パーセントだが、高齢者では裕福な上流層の人を除いたら多くは知らないのではという。個人的事情などの影響があるのだろうと聞いていたが、ハタと気がついた。ベトナムは第二次大戦後も、アメリカが介入したベトナム戦争など、10年以上も戦いが続いた。その間、戦争に駆り出された人たちの多くは、ベトナム語の文字を学ぶ機会を逸したに違いない。あの老人もそうであり、また私を日本人と見抜いたのも、彼が日本軍が進駐した時期を体験していたからかもしれない。

聞きかじりの知識でしかないが、ベトナムは古く漢字を当て字にした「字喃(チュノム)」を公文書等に用いていた。17世紀にフランス人の宣教師アレクサンドル・ドウロードがベトナム語をローマ字表記で書くことを編み出し、その後フランスの植民地時代を経て、人々の間に一般化していったという。しかし、あいつぐ戦争の間にそのベトナム語を修得できなかった人々もいたのである。

結局、わたしの昔話研究はままたまならなかったが、遠く薄くなりつつある「ベトナム戦争反対」の記憶を思い起こし、戦争の影を肌で感じる旅になった。

(神奈川県)



## 事務局便り

### ○寄贈書籍

- ・村上郁再話／青木智史・竹原威滋編『子どもと家庭のための奈良の民話』一・二・三 奈良の民話を語りつぐ会 年 月・ 月、 年 月
- ・鈴木健之編『「中国民間故事集成」総目索引』私家版 年 月
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告』第 集 年 月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第 巻 ・ ・ 号 年 月～ 月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第 ・ 号 年 月・ 月
- ・畠山篤著『河内王朝の山海の政一枯野琴と国栖奏』白地社 年 月
- ・『国立歴史民俗博物館年報 ( 年度)』 年 月
- ・保坂達雄著『神話の生成と折口学の射程』岩田書院 年 月

### ○日本口承文芸学会事務局

〒 東京都調布市緑ヶ丘 -  
白百合女子大学 間宮史子研究室  
(内線 )  
(児童文化研究センター)

\* 2期4年間に渡って事務局を務めてまいりましたが、任期満了に伴い、来年度には事務局が移転いたします。会員の皆さまのご理解とご協力に心よりお礼申し上げます。

---

### 日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なされる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP ( ) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金 円、年会費 円です。郵便振替口座 をご利用下さい。